図書だより

平成三〇年一〇月三一日
発行　豊南高等学校図書委員会

今年も「秋の読書週間」が一〇月二七日からスタートしました。

芥川賞、直木賞といった馴染み深い賞と並んで、優れた評論、エッセイに贈られる小林秀雄賞という賞があります。今回は、その賞の二〇一六年第十五回受賞作の森田真生著『数学する身体』新潮社を紹介したいと思います。

コンピュータが一人歩きし、人の手に負えなくなりそうな予感がする現在だからこそ、数学（機械）と人間の相互関係を考察することは、より一層必要になっているのではないでしょうか。森田真生著『数学する身体』は、こうした意味でとても考えさせられ、数学に対しても、新しい見方を発見できる本だと思います。

人間の「数える」道具であった数学は、近代ヨーロッパにおいて形式化、記号化され、「人間の身体からそぎ落とされるように」変容してきました。

しかし、人口知能の父と呼ばれるアラン・チューリングを「心を作ることによって心を理解しようとした」と表現する著者にとって、数学する生身の人間の存在は、数学の変容において切り離すことの出来ない本質的なものです。

「数学と数学する身体とは、これからも互いに互いを編みながら、私たちの知らない新たな風景を、生み出し続けることになるだろう」―『数学する身体』最終章より

数学及び科学の未来にいくばくかの不安を抱える私達にとっても「互いに互いを編みながら」は、理想の形といえるでしょう。

☆君に贈る本（キミ本）大賞

キミ本大賞は全国各地の中学・高校の先生が中高生たちに是非とも読んで欲しい本を選び、その結果を集計したものです。第四回のランキングは次のとおりです。読書週間を機にこれらの本をより多くの皆さんが読んでくれることを願っています。

一位　『君たちはどう生きるか』吉野源三郎
二位　『星の王子さま』　サン・テグジュペリ
三位　『蜜蜂と遠雷』　恩田陸
四位　『陸王』　池井戸潤
五位　『嫌われる勇気』　岸見一郎・古賀史健
六位　『二十一世紀に生きる君たちへ』　司馬遼太郎
七位　『夜と霧』　ヴィクトール・E・フランクル
八位　『深夜特急』　沢木耕太郎
　　『坂の上の雲』　司馬遼太郎
十一位　『モモ』　ミヒャエル・エンデ
十二位　『わたしを離さないで』　カズオ・イシグロ
十三位　『天地明察』　冲方丁
　　『生きるぼくら』　原田マハ
十五位　『十二番目の天使』　オグ・マンディーノ
　　『かがみの孤城』　辻村深月
　　『きみの友だち』　重松清
　　『ナミヤ雑貨店の奇蹟』　東野圭吾
十八位　『ぼくは勉強ができない』　山田詠美
十九位　『下町ロケット』　池井戸潤
二十位　『青い鳥』　重松清
　　『図書館戦争』　有川浩
　　『羊と鋼の森』　宮下奈都
　　『僕は、そして僕たちはどう生きるか』　梨木香歩
　　『ミライの授業』　瀧本哲史

☆一押しの本！

・守隨憲道校長先生
『橋をかける』－子供時代の読書の思い出－
皇后　美智子様（文春文庫）

品格、教養ともに日本を代表する女性。特に本にまつわる講演は、世界中の人々から賞賛され続けています。子ども達が、自分の中に、しっかりとした根を持つために子ども達が、喜びと想像の強い翼を持つために子ども達が、痛みを伴う愛を知るために
そして、子ども達が人生の複雑さに耐え、それぞれに与えられた人生を受け入れて生き、やがて一人一人、私共全てのふるさとであるこの地球で、平和の道具となっていくために。
で結ばれる、平成十年インドで開催された国際児童図書評議会（第二十六回世界大会）の基調講演他が収められています。先日十月二十日、今上天皇の皇后として最後の誕生日を迎えられた談話とともに読んでみてはいかがでしょうか。

・難波絵美先生
『日本－その姿と心－日英対訳』（日鉄住金総研株式会社）

この本は、日本の地理、歴史、政治、経済、企業経営、社会、文化、風俗習慣などについて、日本語と英語で説明しています。是非オリンピックの前に、興味があるところだけでもいいので読んでみて下さい。

・正木匠先生
『ギブ・ミー・ア・チャンス』　荻原浩　（文春文庫）

元力士の探偵、売れない演歌歌手、元ＣＡのローカル列車の客室乗務員等々、夢を諦めきれない不器用だが愛すべき八人の奮闘を書いた短編集。読みやすく、笑って泣けてほっこり。生きる勇気をちょっともらえる佳作で、暇なときに気軽に手に取って欲しい本です。

・小川能子先生
『生きるぼくら』　原田マハ　（徳間文庫）
米作りから様々な事を学び、自分自身を取り戻していく人々。「生きる」ことの意味が温かく大切に描かれている一冊です。

・水野冬馬先生
『車イスホスト』　寺田ユースケ　（双葉社）
「ホストなんて」という考えは偏見。では「車イスだから」という考えは？同じく偏見。自らの実体験からそう気付いていく実話。先日公開プロポーズに成功し、次々と成功を手にした脳性まひの青年がつづった一冊。

・三年生女子生徒
『ふたご』　藤崎彩織　（文藝春秋）
この本は、SEKAI NO OWARI を担当しているSaori さんが藤崎彩織として書きました。処女作であるにも関わらず直木賞にノミネートされ話題になった本です。登場人物の「ふたご」の男女が苦難を乗り越え、成長していく物語です。是非読んでみて下さい。

・三年生女子生徒
『うまくいっている人の考え方』
ジェリー・ミンチントン
（ディスカヴァー・トゥエンティワン）
同じ人間でありながら、届かないくらい凄い人と凡人がいるのはなぜか。その主な違いに「思考」があると思います。この本を読んで上手くいく思考回路を身に付けることが成功の近道かもしれません。

・二年生女子
『妖怪アパートの幽雅な日常』
香月日輪　（講談社文庫）
主人公は高校生の稲葉タエ。中学生の頃に両親を亡くし、親戚の家で肩身の狭い思いをしていたタエは、高校生になったら一人暮らしをすることを決意。ひょんなことで知ったアパートには― 妖怪 ―が出るらしくて！あなたの「普通」を壊してくれる妖しく幽雅な物語です。

・一年生男子
『精霊の守り人』　上橋菜穂子　（偕成社）
女用心棒バルサが、新ヨゴ皇国のニノ妃から皇子チャグムを託され、皇子を守るため父帝が差し向けてくる刺客や、異界の魔物と戦い続ける作品。この本はいくつかの賞を受賞し、テレビ放送もされました。女性ながらに凛々しく戦うバルサの姿がカッコよく、勇気を持って生きることの大切さを教えられました。

・一年生男子
『コンビニ人間』　村田沙耶香　（文藝春秋）
よくコンビニ店を利用するので、この本のタイトルに魅かれて読んでみました。コミュニケーション障害を思わせるコンビニ店員の女性が不思議な恋愛を経て、明るく生まれ変わるという物語です。読み始めた時、その女性がどうなることかと思いましたが、最後には新しい自分になれてホッとしました。

金色の　ちひさき鳥の
かたちして　銀杏ちるなり
夕日の岡に
与謝野晶子